
IS 転生者は二度目の学園生活を送る

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者は一度目の学園生活を送る

【ノード】

N9010V

【作者名】

コウ

【あらすじ】

アニメ好きな神によりISの世界に転生（強制的に）した男は8年前に起こった戦いから時がたち再び学生として学園に戻ってきた！一夏よりも先にISを動かし、千冬達と幼馴染みの男が送る一度目の学園生活！！

原作とは違つ世界で一体何が起きるのか！

プロローグ（前書き）

「コードギアス LOST COLORS」をやつたら書いてみたいと思つたのでやってみました。
駄文ですがよろしくお願ひします。

プロローグ

HS学園校門前

今、1人の男が学園の校門の前で立っていた。

その男の名は皇ライ

ライの姿は銀髪にして蒼眼、道を歩けば女性が振り返り、男性からは嫉妬の集中豪雨をあびるよつた顔をしている。

「HSに来るのは久しぶりだな」

ライは懐かしむ様に学園を見ていた。

すると、学園の方から1人の男性がやつて来て挨拶をしてきた。

（ライ視点）

「久しぶりですね、皇くん」

「ええ、お久しぶりです繩木さん」

その男性の名は「繩木十蔵」学園では用務員をしており、親しみや

すさからか『学園内の良心』と呼ばれているが実態はトウ学園の実務関係を取り仕切っている事実上の運営者である。ちなみに…奥さんは「この学園の学園長で夫婦円満らしい。

「トウの度はありがとうございます、繩木さん。

俺をまたここに生徒にしてくれて。」

俺は繩木さんに頭を下げてお礼を言つ。

「良いんですよ、頗る感謝してもしきれないだけの恩がありますし」

セリフと繩木さんは俺に頭を上げるように言つてくれた。

「それに、今年は2人目の男性のTDS操縦者もいますしね。たしか…織斑先生の弟さんで、名前は織斑一夏くんでしたか？」

「はい、俺の弟みたいなものですよ」

一夏は元気してるかな、相変わらず朴念仁で生夫してるんだろうな」と若干失礼な事を考えてくると…

「そうですか、なら織斑先生は奥さんですかね？」
…ハイ？

「繩木さん、それは千冬に失礼ですよ
千冬は、ただの、幼馴染みですよ

俺の奥さんなんて千冬が怒ります

まったく何て事を言うんだ、千冬の耳に入ったら纏木さんでもただではすまないだろ？…

千冬は怒ると抑えるのが大変だからな…カレンもだがそれにここ2年はまったく連絡してないからな

下手したら会った瞬間に2人に殺されるかもしれん。

「はあ……織斑先生の恋は前途多難ですね

ああ…紅月先生や山田先生もでしたか

「何か言いましたか、纏木さん？」

「いえ、何でもないですよ皇くん

纏木さんがそう言って否定するので、俺はそれ以上追求しなかった……と言つが今はびしきつて千冬達に会わないようにするかでそれびしきつでは無かつた。

「さて…いつまでもここに居るわけにはいきません、皇くんには早速クラスに行つてもらいますよ

「…………はい」

まあ…何とかなるだろ学園は広いんだ上手くいけば今日1日は少なくとも平穀であつてくれるだろ…優しい神は（少なくとも俺を転生させた神ではない神）いるはずだしな。

「そういえば、皇くんのクラスの担任は織斑先生、副担任は紅月先生と山田先生ですよ」

神なんて嫌いだあああ！！

とりあえず、できるだけ早く更新できるよう無い文才を振り絞って
頑張ります！

インフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォームスーツが篠ノ之束の手によつて開発された時、世界の情勢は一変した。ISには通常兵器があるで役に立たず、IS一機であらゆる戦況へ対応が可能、陸海空、どの戦力もISには通用しない。その認識が世界へ広まつた時、兵器への転用が危惧されたが、世界の思惑から外れた、なぜならISには一つだけ致命的な欠陥があつたからだ。

それは、ISは詳しい原因は不明だが、女性にしか扱えないと言う事。その事実が浮き彫りになつた時から、女性優遇の体制が世界中に広まり、そして現在は女尊男卑の風潮が広がつていつた。

そんな中、世界で2人目の男のIS操縦者がいた

名前は織斑一夏

そして、一夏はそれが原因でIS学園に入学することになつた。

（一夏視点）

「全員揃つてますね。

それじゃあSHRははじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任」と山田真耶先生

「それでは畠さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「…………」

けれど変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない

「じゃ、じゃあ血口紹介をお願いします

えっと、出席番号順で」

ちょっとひいたえる先生がかわいそなので、俺だけでも反応してあげたいが…………無理だ

なぜなら、このクラスは俺以外全員女子だからだ……！

全員から視線を感じる、かなりいたたまれない……

「…………」

救いを求めて窓際の方に視線を送った

だが、薄情なことに幼馴染みの篠ノ之箒はふいつと窓の外に視線をそらした

なんてやつだ、これが六年ぶりに会つた幼馴染みに対する態度だろうか……

「……くん。織斑一夏くんつ」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で呼ばれて思わず声が裏返つてしまつた

「あ、あの、お、大声出しちゃって」めんなさい
お、怒ってる？怒ってるかな？

「ゴメンね、ゴメンね！」

でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くん
なんだよね。だからね、『』、『ゴメンね？自己紹介してくれるかな？
だ、ダメかな？』

……この人は本当に年上なんだろうか？

同じ年と言われば納得してしまいそうなんだけど…

「あの、そんなに謝らなくても……って言つた自己紹介しますから、
先生落ち着いて下さー」

「ほ、本当？本当ですか？や、約束ですよ？絶対ですよー。」

俺の手を取つて熱心に詰め寄る先生
ちゅ、注目が更に増したー？！

「えー……と織斑一夏です。ようしくお願ひします。」

儀礼的に頭を下げて、上げる

……ちよつと待て！

なんだその『もっと色々しゃべつてよ』的な視線はー？

そして何だこの『これで終わらじやないよね』って空気はー？

俺は「この空氣の中思こねつて口にした！」

「以上です！」

がたたつ！

思わずずつこける女子が数名いた
どんだけ期待してんだよ…無茶いうなー…と思つていると

スパン！

「挨拶も碌に出来んのか、馬鹿者が」

「グオオオオ、あ、頭が！？」

「い、いや、ひょっとしてこの呪を眞合と声は…
恐る恐る振り返ると…

「げえつ、町布ーー？」

スパン！

「誰が二国志最強の武将だ、馬鹿者がー！」

田の前には俺の姉、織斑千冬がいた
……つて、ちよつと待て！

「何で千冬？『スパーン！』…グオオ」

「織斑先生と呼べ」

「口より先に手を出さないで欲しい…そんなんだからいつまでたってもライ兄に好きって言え！『スパーン！』」

「今、失礼なことを考えただろ」

「い、いえ別に」

「お、俺の姉は読心術までできるのか…」

「あ、織斑先生、紅月先生会議は終わつたんですか」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「なんて優しい声

「天下無双の呂布はどこに行つたんだ！？
つて…紅月先生！？」

「か、カレンさんまだ『スパーン！』」

「貴様には学習能力は無いのか？」

「俺の脳細胞がああ…」

「久しぶりね、一夏くん。」

「はい、お久しぶりです紅月先生」

千冬姉の後ろから顔を出したカレンさんが笑顔で挨拶してきたので、俺は痛い頭を抑えながら挨拶を返した

「さて諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな」

「皆、一年間よろしくね」

カレンさんはいたつて一般的なあいさつだが

千冬姉は生徒達にキツい発げり『キャー本物の千冬様とカレン様よ！』

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様達に憧れて北九州からこの学園にきました！」

「あの千冬様とカレン様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様達のためなら死ねます！」

「…毎年、よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「ハ…ハハ…」

千冬は本気であきれ、カレンさんは苦笑していた

元気なクラスメイト達だよ……つん

その後は俺と千冬姉が姉弟なのがバレたがタイミングよくチャイム

が鳴つて一時間目が始まった

「あ

「これはダメだ無理だ！

わからん、まったくわからん…ライ兄、俺は早くも挫折しそうだよ
俺は一時間目のEJS基礎理論授業が終わり、机に突つ伏していた…

「ちよつと良いか？」

「え？」

そんな中俺に話しかけてきた女子がいた
顔を上げるとそこには

「……筈？」

「……」

幼馴染みの篠ノ之篠がいた

「廊下でいいか」

と直つと俺は篠に廊下へ連れ出された

「やつこえば」

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「…………何でそんなこと知ってるんだ」

「何でって、新聞で見たし……」

「な、何で新聞なんか見てるんだ」

「俺には新聞を自由に見る権利も無いのかよー!?」

「べ、別にそこまで言つてないが……

そ、それより一夏訊きたいことがあるんだが……」

「ん、何だ?」

「そ、その…………ライさんがどこにいるか知らないか?」

「ライ兄?」

いや、俺も知らないな

千冬姉やカレンさんも探してるみたいだけど、まだ見つかってない
つて」

「そ、そつか……」

知らないとわかると篠は肩を落として落ち込んだ
そういうえば、篠は昔からライ兄が好きだったよな
千冬姉やカレンさん、束さんもだしライ兄はモテるからな

スパン！

「とつと席につけ織斑」

「……」指導ありがとひざります、織斑先生」

いつの間にか一緒にいた筈は席についていた

俺の脳細胞は午前中だけどうのぐらう死ぬんだうか

「 であるからして、IISの基本的な運用は現時点で国家の認証
が必要であり、枠内を逸脱したIIS運用をした場合は、刑法によつ
て罰せられ 」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。ってか意外だ……山田先
生のことだから、授業もあたふたしてる内に終了。そんな感じをイ
メージしてたんだが……そんなことよつ。

俺の目の前にはざつと積まれた教科書五冊。正直に言おつ。サ
ッパリ分からん。

一番上のものをぱらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか
見えない。分かることといつたら日本語といつとくらうだ。

「織斑くん、何かわからないうとこりうがありますか？」

「あ、えっと……」

「わからないといふのがあつたら訊いてくださいね。

なにせ私は先生ですから」

わざわざ訊いてくれた先生はえつくんと言ったやつは、胸をはる。

もしかして、本当は頼れる先生なのでは?

よし訊いてみよう。

「先生!」

「はい、織斑くん!」

「ほんとうに全部わかりません」

何事も素直でなくては、素直に言えれば受け入れてくれるはずだ!

「え……。ぜ、全部ですか……?」

「え、えつと……織斑くん以外で、わからないっていう人はどれぐらいいますか?」

……シーン……

あれ、おかしいな他にもいるはずだ!
皆素直になるんだ!

「……織斑、入学前の参考書は読んだか?」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパン！

「必読と書いてあったのが馬鹿者」

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ、いいなー。」

「いや、一週間での分厚さはちょっと…」

「やれと言つてこる」

「……はい、やつます」

ギロッと睨む田は人間の皮を被つた悪魔だ、間違いない！
あと、カレンさん！

顔を後ろに隠して笑つてないで助けて下せよ…！

まあ、そんなこんなで一時間田はなんとか終わった。

「うふつと、よひしへ？』

「へ？」

一時間目の休み時間、俺は突然話しかけられ素つ頓狂な声を出してしまった。

「まあなんですの！その気の抜けたお返事は…この私に話しかけてもううだけでも光榮なことですのに！その自覚はあります？」

「悪いな、俺は君が誰か知らないんだ」

余りにも千冬姉達の登場がショックキング過ぎてな…

「わたくしを知らない？
このセシリ亞・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを…？」

あ、セシリ亞って言うんだ、ふうん。

「あ、質問良いか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「代表候補生って、何？」

がたたつ！

クラスの女子が数名ずつ「けた、どうかしたのか皆？」

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃりますのー!？」

「おひ。知りん」

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国とこいつのは、こいつまで未開の地なのをしら。常識ですわよ常識。テレビがないのかしら…」

失礼なテレビぐらーにあるぞ、見ないけど

それにも、この場にライ兄やカレンさんがないなくて良かつた。あの人達の前で日本を侮辱するのは紐無しのバンジージャンプをするのと同じことだからな…

「で、代表候補生って?」

「国家IIS操縦者の、その候補生として選出されるHリー卜の」
ですわ。…あなた、単語から想像したらわかるでしょ?」

「そういわれればそうだな
うん、納得だ

「そう、Hリー卜なのですわ…」

さすがは代表候補生、復活するのも早いな

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「さうか、それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

いや、自分でいつたんじゃないかな

「大体EISについて何も知らないこのへんの学園に入れましたわ
ね男でEISを動かせるというから少しぐらい知性を感じさせるかと
思つたけど期待はずれですわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが？」

「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなたのよつな人間
にも優しくしてあげますわよ。」

そんな優しさは初めてきいたぞ？

「まあ。わたくしは優秀ですからあなたが泣いて頼んできたら……
教えて差し上げてもよくつてよ何せわたくし、入試で唯一教官を倒
したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？　EIS動かして戦つてやつ？」

「それ以外にありませんわ」

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

まあ……あれは倒したところより血濁だと思つけどな……

「わ、わたくしじだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ！

あ、何か嫌な音だ。

氷にヒビが入つたようなそんな音だ。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したつて言ひのー・？」

「うん、まあ……たぶん」

「たぶん！？たぶんひでじうこつ意味かしづ」

「えーと、落ち着けよ、な？」

「」
「えー、これが落ち着いていられ

キーンゴーンカーンゴーン

話しに割つて入つたのは三時間目開始のチャイムだった。

「ひ……一またあとで来ますわー逃げないことねーよくつてー？」

よくなーい、と言わなーい方のが吉だな。

「それでは、この授業では実戦で使う各種装備の特性について説明する」

「三時間目は、一、二時間目と違つて山田先生じゃなくて千冬姉が授業をやるらしい」というか山田先生はノートを取つてゐし、カレンさんは授業の様子を見てるみたいだな

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

「ふと、思い出したよ、千冬姉が言つ

「クラス代表者はそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

教室内が少し騒がしくなつた、すると一人の生徒が手をあげて

「はい、織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思想います」

「では候補者は織斑一夏……他にいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

思わず立ち上がりてしまった

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいなか？いなかなら無投票当選だぞ」

「ちよひ、ちよひと待つた！俺はそんなのやうな」

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権はなどない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも」

「待つてくださいー納得がいきませんわー！」

俺の反論を遮つて立ち上がつたのは、あのセシリ亞なんとかさんだ

「そのよつな選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥ぢらしですわ！ わたくし、このセシリ亞・オルコットにそのよつな屈辱を一年間味わえとおつしやるのですか！？」

よし、セシリ亞なんとかさんもつと叫つてや……ん？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからといつ理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのよつな島国までE.S.技術を修練しに来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

「おこおい、それは言ひ過ぎじゃないか？」

「どうか、それ以上は止めておいた方が良いぞセシリ亞なんとか、カレンさんの額に青筋がたつてるから

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「……代表にはなりたくないが、ここまで言われると癪だな
カレンさんも教師の立場だからか抑えている……相変わらず青筋はたつてゐるが

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては」

ブチツ！

駄目だ頭に来た！

「イギリス『おい小娘、それ以上私の祖国と弟を侮辱するのは許さんぞ？』だつ……て……え？」

俺の言葉を遮つて教室の扉から一人の人物が入つてきた

え……ライ兄？

1話（後書き）

なんか中途半端に終わってしまった
つたない小説ですが、どうか広い心でこれからもよろしくお願いし
ます。

誤字脱字がありましたらおつて下さい。

2話（前書き）

まだ、たいして書いてないのに早くも小説を書く大変さを実感します。
ですが、頑張って行きたいと思します！

暁の魔さん、感想ありがとうございました！

（ライ観点）

「…ついに来てしまった」

轟木さんと別れた後、俺は制服に着替え自分のクラスに向かうはずだったんだが、ついつい懐かしくて学園内を見て回ってしまった

そして気づいたら二時間目がもう始まる時間に……

いや、別に千冬達から逃げたくてちよつと現実逃避してたわけではない、本氣で！

そして俺は今『1 1』の教室の前にいるわけだが……

『実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までE.S.技術を修練しに来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ！』

教室の中から甲高い声が聞こえてきた……

聞いてる限りだと、クラス代表を決めていて一夏が候補に挙がったのに反論したつてところか…

にしても、なんだこの生徒は日本人を極東の猿だと…

だいたい、イギリスだって島国だろ！？

何かまだ色々言つてるな

だが我慢だ、相手は年下の娘じゃないか
大人の心で我慢…

『大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとつては』

ブチッ！

できるかあああああ！

気づくと俺は教室の扉を開けてしまつていた…

「おい小娘、それ以上私の祖国と弟を侮辱するのは許さんぞっ！」

何か一夏の言葉を遮つてしまつたみたいだが…

まあ……いいか

それよりも、今はこの小娘をどうするかが最優先だ

クラスは、突然入ってきたライ兄の雰囲気で静まりかえっていた。
俺や篠、千冬姉とカレンさんは余りに突然の再会で口をポカンと開けていた

「君がセシリ亞・オルコットか？」

「え？ あ、あの…はい
あ、あの…あなたは…」

「私が？ 私は皇ライ

今日から、この学園の生徒になった者だ」

「つー？」

セシリ亞が名前を聞いた瞬間、ビクッと肩を震わせた
ん、ライ兄を知ってるのか？
というか、口調が変わってるぞ？
まあ、この空気じゃ仕方ないが… 気温が5。は下がった気がする…

「私の自己紹介は後でしよう」

「セシリア・オルコット、君はさつき男を下に見る発言をしていた
がIS使えるなら対等じゃないのか？」

それに一体君に日本を侮辱する権利があるのか？どうなんだ？」

「そ、それは……」

「ライ兄……キレてるよな？セシリア……」のままじゃ不味いんじゃ…

「私はなオルコット…」

日本と日本人を侮辱する奴とそして何より身内を侮辱する奴が嫌い
なんだよ」

その瞬間、ライ兄がセシリアに殺氣をぶつけたのがわかった
俺まで冷や汗が流れてるんだ、まともに受けているセシリアは顔面
蒼白になっている…

「う…止めるんだ！」

「駄目よ、ライ！」

「…………すまない二人共」

千冬姉とカレンさんがこの空気の中、ライ兄を止めに入った

ライ兄は一人の顔を見ると落ち着いたのか
さつきまでの冷たさが消えていた

「ふう、それではクラス代表を決めるために試合を行う。

試合は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコットはそれぞれ準備して、『ちょっと待つてくれ織斑先生、その試合俺も参加させて欲しい』……何?』

「だから、俺も参加すると言つたんです（ここから世界の瓜を）を教えておくのも一興だろ）』

「（なるほど、やつこう事ですかわかりました

それと、後で色々訊きたいことがあるので覚悟してこなさい）』

「（……………じつか一つ穩便に）』

「（無理です）

良いだろ、では織斑、オルコットの勝つた方が皇と闘つける

何か色々決まつてしまつたが……反論しても無意味なんだろ?な

「二人ともそれで良いな」

「は、はい、それで構いませんわ」

「……………はい」

では皇、オルコット紹介しろ

「わかりました。

先ほどはいきなりすまなかつた。

俺の名前は皇ライ、皆とは年も離れているが気にせず接して欲しい。よろしく頼む。」

と柔らかい声で自己紹介しライ兄は一礼した。

キレイになると差がありすぎるな……

ケラスの體は一體どんな反応がや

「めちめちくちゅうかッ!!」

「怒ってる時のギャップかい!!」

「神様ありがとー！」の地球に生んでくれて

うん、Jのクラスの空気には早くなれた方が良さそうだ
それと最後の！
生んでくれたのは神様じゃなくてお母さんだ！

「さて、自己紹介はいじめでだ

授業を始める

こうして授業が進み、休み時間になつた。

「授業は終わりだ。」

皇、織斑、篠ノ之は私についてこい

紅月先生も来て下さい」

千冬姉はそう言つとあき教室に俺たちをつれていつた

「さて、ライさん一体これはどういう事が説明してくれますか？」

「いや、ほり…俺つてこの学園をきちんと卒業していないだろ？だからもう一度生徒としての人（轡木さん）に招かれたんだ」

「そうですか……

ですが、私はまったく聞いてないんですが？」

千冬姉は一瞬表情が暗くなつたが、すぐにいつも通りの表情に戻つた
どうしたんだろうか？

「え、と、あの人人が言つには……サプライズだつて」

「はあ……まつたくあの人人は」

「え、ライ兄つて卒業してないの！？」

それにはの入つて誰だよ、千…織斑先生？」

「今は私たちしかいないから千冬姉で構わん
卒業の話しに關してはいざれ話す」

「そ、そつ

ところで、ライ兄は今までどこに行つてたんだ？」

俺は……いや、俺たちが一番知りたい事を訊いた

「そうよ、ライ今までどこにいたのよ…

束に訊いても知らないって言うし

私たちがどれだけ心配したか知ってるの？！」

「やつですね、納得のこゝ理由を話して貰こまよ」ライさん

「いや、ライさん、私も知りたいです」

俺、カレンさん、千冬姉、篠に詰め寄られたんだ

「え、えーと、束と世界を回つたんだ」

『はあああああー?』

カレンさんと千冬姉、篠の声が綺麗に重なつた

「ちよ、ちよーと、待つてよ

私束に訊いた時、知らないつて言つてたわよー?』

「わ、私もです!」

「くつ、束騙したなー!..」

三人ともめぢやくぢや悔しがつてゐ

といふか篠、お前束さんを避けてたんじやなかつたか? どんだけ知りたかつたんだよ...

「ん、てことは...「ライ兄つて束さんとずっと一緒に生活してたんだ?」

「ん...ああ、そうだ

『ー?』

今、千冬姉達に雷が落ちたよつて見えたんだが…

『「ひ、ライ（わふ）……』』

「つまつ、な、なんだ？」

千冬姉達がまたライ兄に詰め寄つた

「「ひ、ライ？」

あ、あなた…」

「あ、まさか…」

「姉さんと…」

「何を勘違いしてゐるか知らないが…束とは何もないぞ」

『「べ、別に勘違いなんてしてません（なにわよ）……』』

いや、明らかにしてたでしょ。

「なら良いが…

とこつか、束とは、ただの、幼馴染みだ
何かが起じるわけないだろ

『…………』

「…………さうね、心配するだけ無駄だつたわね…」

「…………」の人は「いつも……」

「ライ兄……」

「？」

ライ兄に三人から非難の視線が送られるが…
ライ兄はわかつてないんだろうな…

「ゴホン、さてそろそろ休み時間が終わる
お前達、教室に戻るぞ」

千冬姉の言葉で休み時間がもう終わる事に気づいた
俺たちは教室に戻りつつあき教室を出ようとしたが…

「みんな、ちよつと待て」

『?.』

ライ兄に呼び止められた

「えーと、その…
た、ただいま」

ライ兄は頬をかきながらそう言った
俺たちは顔を見合せ

そして

『おかげ (なさい) ー』

笑顔で返した

『 ところで、ライ (あい) 』

「 ん、なんだ? 」

『 今度、数年間の埋め合せしなやか (じてきやか) 』

「 ハイ

ライ兄、ドンマイ

え～無理矢理感がすゞく感じますね、申し訳ありません

誤字脱字がありましたら、言つて下せご。

キャラ設定（前書き）

内容は随時追加予定です

キャラ設定

名前	皇ライ
年齢	26
容姿	銀髪に蒼眼
(Lost Colorsのパーフェクトガイドに載つてたのを記載)	(Lost Colorsのパーフェクトガイドに載つてたのを記載)
身長	180前後
性格	普段は温厚だがキレると口調が変わり「俺」から「私」になる天然ぽい部分あり
朴念仁	朴念仁
IS適性	Sランク
備考	コードギアス Lost Colorsの主人公のライ ギアス篇で再び眠りについたがアニメ好きな神によってISの世界へ転生させられた。
その際、神によって記憶やギアスは消されており、転生させられたと言つ記憶だけを持つている。	その後、アメリカ人の父と日本人の母の元に転生するが、ライが幼い時に亡くなり母方の祖父に引き取られる。千冬やカレン、束とは幼い頃からの付き合い。
三人とは年が1つ違うが本人は余り気にしていない。	実際にカレンは主人公を呼び捨てで呼ぶ。
8年前、「黒騎士事件」に参加している。	

ISの操縦技能は千冬やカレンと互角に渡り合える程で、指揮能力にも長けている。

現在、8年前の「黒騎士事件」で破損したISの代わりにガンダムOOの世界のスサノオを多少改良した「須佐之男」を神から一時的に受けとっている。

名前	紅月カレン
年齢	25
容姿	コードギアスのカレン
性格	快活で直情的

IS適性 Sランク

備考 コードギアスの紅月カレンそのままである。

ただ、原作とは違い母親とは特に問題もなく良い親子関係を築いている。

ただ、父親はおらず兄もいない。

ライや千冬、束とは幼馴染みで一夏や篠の2人目の姉的存在。鈴とも面識がある。

ライに想いを寄せしており、同じく想いを寄せている千冬や束に比べ一步遅れている事を気にしている。

8年前の「黒騎士事件」に参加している。

ISの操縦技能は千冬と互角以上に渡り合える程。

IS 設定

IS名 「須佐之男」

持ち主 ライ

製作者 神

（一般的には束が作った事になっている）

世代 第四世代：一応

待機状態 当初は仮面の予定だったが悪趣味と言つ事で黒い腕輪になつた

ガンダムのスサノオをIS化させたもの。

神がライに一時的に貸したIS、なぜスサノオのかは単純に神（作者）が好きだから、とのこと。

束との旅の最中に神から渡された、未知の技術を使用しているため表向きは実験機と言うことになつてている。

主な武装

強化サーベル「シラヌイ」「ウンリュウ」

両方とも実体剣とGN粒子を纏わせることでビームサーベルとしての特性も併せ持つ。

。 2本の柄を連結させることで、双刃の薙刀「ソウテン（蒼天）」

となる。

トライパーティッシュヤー

腹部と両肩の砲口を開闊し、3門のビームを球状に収束・圧縮して撃ち出す。

ただし、粒子消費量がかなり多いのが難点。

ワンオフ・アビリティー（単一仕様能力）

トランザム

ゼロさん、犬丸さん、感想ありがとうございました。

～ライ視点～

あれから時がたち放課後になつた
俺は一夏に工事について教えていた

「～と言ひ訳だ、解つたか一夏？」

「な、何とか

頭から煙が出てるが…

まあ、専門用語がたくさんあるからな…

「ああ、織斑くんと皇先輩、まだ教室にいたんですね。よかつたで
す」

「山田先生、俺は今は生徒なので先輩はひょり…」

「あつーす、すいません

「まあ…早く馴れるよつ頑張つて下さー。

それで、何か用があつたんじゃないんですか？」

「や、そうでした！

えつとですね、寮の部屋が決まりました

「あれ、俺の部屋は決まって無いって話を聞いたんですけど、一週間は自宅から通うって事になつてたはずじゃあ？」

「俺の後ろから一夏が山田くんに訊いた

「そつなんですけど、事情が事情なので一時的に部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

「部屋の件は解りましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰つていでですか？」

「俺は旅の荷物を持ったまま来たから別にいいですよ」

荷物は轡木さんに預けてあるからな
後で取りに行かなくては…

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいたありがたく思え
皇のも預かってきている」

「ん…そつですか、ありがとひー」やれこまます。」

「び、びつもありがとひー」やれこまます。」

「まあ、生活必需品だけだがな。

着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろひー」

相変わらず大雑把だな千冬。……

人間には日々の潤いも大事だと思つぞ？

「では、部屋の鍵をお渡します。

一ヶ月もすれば個室の用意ができますから、しばらくは相部屋で我慢して下さご

やつこいつと山田くんは部屋の鍵を俺に渡した

「あれ、俺の鍵は？」

そう言わると一夏の分の鍵がないな

「貴様は私と同じ部屋だ」

「えつーーーお、織斑先生とーーー！」

「そりだ、何か不満でもあるのか？」

「……イエ、ナイデス」

「なら良い（私だつて本当はライせんと……）」

一夏…諦めろ

同世代の男女を相部屋にするのは色々駄目だ…道徳的に俺なら良いのかと言わわれれば…どうなんだろ？

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七

時、寮の一年生用食堂で取つてください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えつと、その、織斑くんと皇…くんは今のところ使えません」

「え、なんですか？」

「まあ……当然ですね」

「夏…本当に分からぬのか？」

さすがにソレは不味いぞ

それと山田くん、あの一瞬の間は何だ？

そんなに抵抗があるのか？

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

やつと気づいたか…

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だつ、ダメですよー！」

「いつ、いや、入りましたくないです」

それが当然だ、万一入りたいと言つたら後ろの鬼（千冬）が黙つてないだろ？…

女子だつて嫌だろ…

でも、一人ぐらい「別に良いですよ、むしろ是非一緒に！」なんて

言いいかね無い奴がいそつだ、この学園

「え、ええつ！？女の子に興味が無いんですか！？そつ、それはそれで問題のような・・・井、まさか…皇…くんと」

ちよつと待つんだ山田くん！？

なぜ、そこで俺が出るんだ、俺はノーマルだ！

そして、廊下で山田くんの言葉を聞いた女子が…

「織斑くん、男しか興味が無いのかしら……しかも相手は皇くん？」

「それはそれで……いいわね。（じゅるじゅる）」

「織斑くんと皇くんの関係を洗つて！すぐにね！明後日までには裏付けとつて！」

俺はノーマルだあああ！！

「えつと、それじゃあ私たち会議があるので、これで。織斑くん、皇…くん、ちやんと寮に帰るんですよ？道草食ひやダメですよ？」

山田くん、校舎と寮の間は50メートルぐらいだぞ？
道草をびつ食えと言つんだ？

「えーと、ここか。1025室だな」

「じゃあライ兄、俺と千冬姉の部屋は向こうだから、また」

「うううう、一夏は自分の部屋に向かっていった

俺は部屋に入ろうと鍵をさしたが、どうやら鍵はあいていたりしこそして、俺は部屋に入つて一直線にベッドにダイブした

「さすがに今日ばかりと疲れた」

旅先から直接来たのだから仕方がないか……

と思つてこるとシャワーがある部屋から聞き覚えのある声がした

「誰かいるのか?」

「ああ、同室になつた者か。これから一年よろしく頼むぞ」

……すげえ嫌な予感がする

「こんな格好ですまないな。

シャワーを使つていた。私は篠ノ花

「…………」

「…………」

篠は突然の出来事にきょとんとした顔をしている。

それが、ちょっと可愛らしいと思ってしまった

「う、う、ううう……？」

「あ、ああ……」

「や……」

「あっ、
き……」

あ、何か嫌な予感

「キヤー——『ちょっと待て、 篦』——!？」

悲鳴をあげた笄の口を抑えようとして
俺は誤ってバランスを崩し、 篦を押し倒す形になってしまった

ヤバい……

いつも時に限って……

「ちょっと、悲鳴が聞こえたけど何かあつ……！？」

部屋が勢いよく開かれ入って来たのは…… カレンだった

状況を確認しよう

俺 バスタオルを一枚巻いただけの色々と際どい状態の笄を押し倒
している

第 顔を赤らめ俺に押し倒されている

カレン 悲鳴が聞こえて入つてみれば俺が簞を押し倒している（事
故）状況を叩撃

黙黙だ……言い訳できる状況下じゃない

「…………フアイ————ツ！」

「ぐがつー?違うんだカレンー」これは事故なんだ…つ…

「遺言は聞いてあげるわよ…まあ…言い残す事はあるかしら…ー?」

カレンは俺の襟首を掴んで立たせるとギリギリと締め上げてくる

「だいたい、なんで、なんで私じゃなくて簞を押し倒してるのよー?」

「あ、君は…な、何を…いつ…て…?」

「ライなんて……!」

い、息が…

「ひ、人の話を……」

「弾けのぉおおおおお…」

カレン…それは俺に死ねと?

そんな事を疑問に思いながら、カレンから見事なパンチを貰い俺は意識を手放した…

「『めんなさい』

意識を取り戻した俺の前でカレンが頭を下げて謝つてきた

「いや、元はと言えば俺が悪いんだ
だから、もう良いよカレン」

「そ、そう? ありがとウライ

それと私が何を言つたか覚えてる?」

「いや、殴られる直前の記憶があやふやで覚えてない」

「や、やつ、なら良いわ」

そう言つとカレンはもう一度『めんな』と言つて部屋を出でていった
何でも仕事に必要な資料を取り部屋に戻る途中だつたらしく、まだ
仕事が残つてゐるのだとか…

「さて、簞本當にすまなかつた！」

不可抗力とはいえたん事をしてしまつて

俺は今まで椅子に座つてた簞に謝罪をした
ちなみに簞の服装は剣道着だ。

「あ、いえ、私も突然の事に驚いてしまつて…
き、氣にしてないので大丈夫ですよ……むしろ嬉しかつたと言いま
すか……」

「ん、最後なんて言つたんだ？」

「い、いえ、何も言つてませんよ？！」

「そ、そつか」

『…………』

少しの沈黙の後先に口を開いたのは簞だつた

「あ、あの、ライさんが私の同居人でいいんですね……よね？」

「あ、ああ、そつだよろしくな」

「は、はい、よろしくお願ひします。

そ、それでですね、この部屋の決まりと言いますか、その、く、暮
らす上で線引きは必要ではないかと……？」

たしかに、ひやんと決めておけばわしがみみたいな事故は無くなるしな

「わかった、ならシャワー室の使用時間は篝が七時から八時。俺が八時から九時でどうだ？」

「は、はい、部活の後に使えるならそれで大丈夫です」

「部活…」

「そういえば、篝は去年の剣道の全国大会で優勝したんだつたな、おめでとう」

今日は色々ありすぎてつい忘れてしまっていた

「な、何で知ってるんですか！？
し、新聞で見たんですか？」

「いや、俺は直接見に行ってたんだ

ある人が篝が全国大会に出るのを教えてくれてな

ある人とはもちろん束の事だ

優勝したのを教えた時は俺以上に喜んでいたな

「あの場にいたんですか！？」

「声をかけてくれれば良かつたのに！」

「いや、あの後すぐに飛行機に乗る必要があつてな
時間が無かつたんだ、ごめんね」

「い、いえ、良いんです来てくれただけでも

篠は応援に来てくれていたのが嬉しかったのか顔を少し赤らめていた

「そうだ、明日から一夏を鍛え直すつもりなんが、篠も手伝ってくれないか？」

「は、はい、是非！」

「そうか、ありがとう！」

「――――

どうしたんだ？

微笑んでお礼を言つただけだが……？

「あ、あの、私はもう寝ます！」

お、おやすみなさい！」

と囁つと篠はベッドの中に入つていった

俺はおやすみと返すとシャワーを浴びてベッドに入つて寝たのであつた。

Yuuuさん、感想ありがとうございます！

～ライ観点～

「（やつこしまつた）」

「—————」

俺は今、顔の赤くしている箒と一緒に食堂に向かっている。
箒が赤くなっている理由は今朝の出来事が原因だ……

朝方、俺はいつも通り六時ぐらいに目がさめた、そしてふと隣の箒のベッドの方を見ると……

着替えの最中の箒がいた

箒さん、何でこんな所で着替えてるんですかね？

「……………？」

あ、箒が気付いた

「これは……昨日のパートーンじゅ？」

「ほ、篠……？」

「…………／＼／＼

篠は顔を赤くしてまるでロボットのよつた動きでシャワー室に入つて行つた

そして現在に至る訳だが

「ほ、篠、すまなかつた」

「い、いえ／＼／＼

こんな感じで何を言つても顔を赤らめたままである

「（）（）れならまだ声をあげられた方が……いや、それはそれで困るが……）」

（）のままと並ぶのはかなり気まずいと呟つて（）ると後ろから声がした

「二人とも、おせよ（）」

「一夏が、おせよ（）」

「お、おせよ（）／＼／＼」

そして篝は顔が赤いまま早足で一人席の方に向かっていた

「ライ兄、何があったのか?」

「ああ……とりあえず席についたら話そう」

俺と一夏は朝食を取つて空いてる席に座つた。
ちなみに、俺は至つて普通の量だが一夏はかなりの量である
そして俺は事情を一夏に話した

「ええ!…?ライ兄と篝つて同じ部屋なのか!…?」

「ああ、何故かは知らないがな」

そんな時三人組がこちらに向かってきた

「織斑くん、皇くん隣いいかな?」

「ああ、別にいいけど」

「俺もいいぞ」

女の子たちは安堵したり……ガツッポーズをしている娘もいるな

「うわ、織斑くんつて朝すつごに食べるんだねー」

「お、男の子だね」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

一夏が女子たちの質問に答えてるの聞いてふと「ナタやカレンもだつたな」と思つていると

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平氣なのか?」

一夏、女子は体重を氣にする生き物なんだぞ

「わ、私たちは、ねえ?」

「う、うん。平氣かな?」

「お菓子よく食べるしー」

間食は程々にな…

そんなこんなで朝食を食べ終わり、今日も一日が始まった

そして時は既に放課後、俺は今一夏を鍛えるために剣道場に来ていた

「なあ、ライ兄一応聞くけどいいって…」

「見ての通り剣道場だ、今からお前を鍛え『なにをしてるー』…
タイミングが良いな、第

しかし、第は顔を赤らめて俺から目を逸らした

「（まだ駄目か…）」

朝から相変わらずの調子である

まあ、一夏を鍛える元に戻るか…

「さて一夏、改めて言つがいい連れて来たのは他でもない、お前を鍛えるためだ」

「え、俺を？」

「ああ、今のお前がオルコットと戦つても、必ず勝てないからな」

「う……………」

まあ…自分でも直覚はしてたみたいだな

「セイでだ、俺と篠で多少マシになるよつじてやる

「え、マシって、勝てるやつはなになの…？」

「はあ……一週間ややこりで勝てるよつじ成る程、一いつはくない

よ

「う…………たしかに」

「わかれば良い、セイでだ一夏、篠と試合をするんだ

「え、何で？」

「まずはその鈍りきつた体を何とかしなくちゃ駄目だらうが
ん、帰宅部で三年間連續皆勤賞さん？」

「な、何故ソレを？」

「織斑先生から聞いた
とりあえず、まずは簎に鍛えて貰え
俺との修行はその後だ」

「…………ハイ」

「よしー

じゃあ、簎あとは頼む」

そうこうと俺は剣道場から出て行くとする

「う、ライせん、どこに行くんですかーーー？」

今今までフリーズしていた簎が再起動した

「何、修行の準備だ」

後日、一夏が言ひにはその時の笑顔はとても黒かった、とのことだ

それからひと回りもの一夏の修行は体力づくり、籌との試合、死角からの攻撃（主にいつでもどけでも隙があれば攻撃）の回避訓練をひたすらやつた

そして今日は月曜日、試合日なのだが……

「まだなのか一夏の専用機のHISはまだか……」

「みたいだな、どれ一夏ギリギリまで修行するか」

「勘弁して下せ……」

「そんなに嫌か？

たしかに食事中や授業中に攻撃したのはやり過だと今は思つが……ちなみに、千冬もたまにだが攻撃していた

それのまへも一夏の専用機遅いな、と思つて……

「織斑君、織斑君……」

山田くんがひたすら走ってきた、しかし今にも転げそつて危なかつ……

「先生、まづ深呼吸してください。はい、吸つて」

「は～ふ～は～ふ～」

一夏、それは年上の人に対する礼儀をしれー？」

「お前は少しばか年上に人に対する礼儀をしれー？」

「後から入ってきた千冬に出席簿で殴られる一夏
ん、カレンがいないな

「織斑先生、紅月先生はどうしたんですか？」

「紅月先生はオルコットの方に行っている
むこうに誰も行かないわけにはいかないからな」

たしかに、教師として例え知り合いでとしても一夏を最悪にするわ
けにはいかないからな

そして千冬の後ろから入ってきたのは…

成る程、そういうことか…
束が作っていたのはこの日のためか…

“白”真っ白で何もない
まるで雪のよくなそんな白

そして、それに触った一夏は言った

「理解できる、これがなにか分かる、なんのためか分かる!」

「HSのハイパーセンサーは問題なく動いているな
気分はどうだ一夏?」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

「ライ兄、千冬姉、篠、行ってくる!」

『行つてこい!』

俺たち三人の声が重なった

（一夏視点）

俺は今セシリア・オルゴットと向き合っている

「最後のチャンスをあげますわ

「チャンスって?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。

ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝る
というのなら、許してあげないこともなくつてよ

「そういうのはチャンスとは言わないな

「やう？ 残念ですわ。それなら

警告！ 敵IJS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー
装填。

「お別れですわね

耳をつんざくような独特の音。

それと同時に走った閃光が刹那、俺を貫くはず……

「なめるな！」

だつた

俺は攻撃を咄嗟に横に避ける

「なつ、わたしの攻撃を避けた！？」

「ライ兄に鍛えられたんだ簡単には負けないぜ！」

そうだ、毎日毎日痛い思いしながらやつて來たんだ……本氣で痛
かつたんだ

「くつ、一回避けただけで調子に乗らないで欲しいですわ！。
さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テ

「アーズの奏でる刀舞曲で…」

「ライ視点」

「うん、修行の成果はあつたか」

一夏は初撃を見事に回避した

修行の成果は有つたみたいで良かつた

「ですね、でも……」

「ああ、あのビームの雨を全弾回避するのはまだ無理だな」

一夏は今BTのビームを回避しているが、避けきれずに当たつているのも少くはない

「でも、一夏は」のままじや終わらないと、ぱり

俺はモニターの方を指差した

「え？」

筈もモニターを見てみると、そこにはビットを一機斬り倒して、セシリ亞に斬りかかる一夏が映つていて

『おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよー』

しかし、接近していた一夏に隠していた弾道型のBTが待ち受けていた

ドカアアアン！

一夏に命中し画面が黒煙に埋まった

「一夏つ…………！」

それを見た筈が思わず声を上げた

「大丈夫だ、筈
ね、織斑先生？」

「ああ、機体に救われたな馬鹿者め」

煙が晴れたそこにはあの純白の機体があつた

真の姿で

あれが持つてているのは…

「雪片式型」、かつて千冬が振るつていた「雪片」と同じ名前を持
つた装備

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ

「だ、そうですよ織斑先生？」

「良かつたですね、織斑先生」

俺、山田くんの順に千冬に言いつと

「山田くん、私はからかわれるのが嫌いだ」

山田くんの頭を掴みアイアンクローをきめる千冬

「な、何で私だけ……」

山田くんから助けて下さい、と言いつ視線を送られるが…

「さて、一夏はどうだ?」

俺はモニターの方を見た

山田くんの救難信号は……見なかつた事にした
何か後ろで嫌な音が聞こえたが……気のせいだな

そしてモニターには雪片を出した一夏がいる

あ……これは……駄目だ

一夏の勢いに圧倒されたオルコットは間合いを詰められた、一部を
除く全員が一夏の勝利を確信しただろう
だが、一夏が勝ったと思った瞬間、ブザーが鳴つた
そして……

『試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

『はっ！？』

アリーナで闘っていた一人が一番驚いているな……

でも、よく頑張ったよ一夏

なかなか、上手く纏められなかつたです。
しかも、かなり拙い気が…

もつと上手く書けるようになりたいですね

紅さん、ゆやさん、イオルさん感想ありがとうございます。

主人公の一人称については後書きで説明します。

（一夏視点）

「馬鹿者め。ISの特徴も知らずに、使うからだ。」

千冬姉

戻ってきた弟に一言田からそれですか……

「はあ……ごめん、ライ兄、籌。一人から色々としてもらったのに」

「気にするな、一夏。
お前は頑張ったよ」

「ありがとう、ライ兄」

ぐすつ、ライ兄だけだよ

労ってくれるのは。

「皇、お前の試合は一時間後だ
オルコットのメンテが終わり次第始める」

「わかりました、織斑先生。じゃそれまでウォーミングアップでも
…」

キランツ！

なんか来た！

この感じは…！

「フンツ！」

「ちよ、のわあ！」

ライ兄からの腰への正拳突き

なんどもくらつていたから、寸前でかわした

つていうかかすつただけでも、アザができるそつな威力なんすけど
！？

「あ、危なツ！」

「まあ、『冗談はこれぐらいにして……』

『冗談つてライ兄……』

それから一時間後、連絡が入った。

セシリ亞の準備がそろそろ終わるらしい

ライ兄の試合まで残り数分まで迫った

「ああ、行こうか」

腕輪から光りが漏れ、ライ兄がIISを展開した

「これがライ兄のIIS……」

俺の目の前には『黒い侍』がいた

鎧武者風の黒い装甲に、一本角が生えたフェイスマスク、一本の刀を持ち背中から赤い粒子を出している全身装甲型のIIS

「なんだ、このHISは……？」

千冬姉も驚いている

とにかく、千冬姉はライ兄のHIS知ってるんじゃないのか……？

「それじゃあ、行つてくるよ」

「あ、ライ兄頑張つて！」

「ライさん、が負けるとは思ひませんが頑張つて下さー」

「…………やはり過ぎなによつにな」

俺達からの声援を聞いた、ライ兄は頷くと発射口へと飛び立つていった

（ライ視点）

「何ですか、そのHISはー？」

アリーナで先に待っていた、オルコットが俺のHISを見て驚いていた

全身装甲型のHISは珍しいが、……そこまで驚く事か？

（フルスキン）

「俺のHSの事は気にするな。

それより一夏はどうだった、なかなかやるだろ?」

「ツー……ええ、正直私が今まで会つたことの無い男性でしたわ」

「わづか…それは何よりだ」

これで彼女の男に対する認識は変わったかな?

「さて、話はHSまでだ
始めよつか」

「ええ、黒騎士事件で三傑と謳われた方とは言え、ただで負けるつもりはありませんわ」

「その呼び方は嫌いなんだけどな……」

「行きますわー!」

オルコットはBTを散開させつつ、スターライト妨碍を放つ

俺は左手の不知火を一閃し、ビームを切り落とした

「ビームを……切つた……!?

オルコットが信じられないものを見るより何が…

「驚いている場合じゃないぞ？」

俺はオルコットに接近し不知火を上段から振るつ

「なつ……」

オルコットは咄嗟に下がるが、反応が遅れていたため完全に避けき
れず、持っていたスターライト MkIIIEが犠牲となつた

「くつ……まだですか」

真つ一つになつたスターライト MkIIIE投げ棄て、BTで牽制し
つつ距離をとる

近づいてダッシュをかけようとしてもBTが邪魔をする

「……ううとおしこな」

俺は撃ち込まれるビームをジグザグに避けBTに接近し、一閃する

「BTが……！？」

綺麗に輪切りになつたBTは、バチバチと音を立てながら落下し、爆発した

「…………あ、これからだ」

（千冬視点）

いまアリーナでライさんとオルコットが闘つている

戦況はどこからどう見ても、ライさんの圧倒的有利

「しかし、あのHSは……」

あのHSは私が知つているライさんのHSとはまったく違つていた

束の試作機か……？

そうとしても、あのHSは現存するHSとは違つ点が多すぎる

それとも全く別の物？

「これは、色々訊かなくてはいけないようだな
「な

当然旅のことも含めて、だ

後でカレンにも連絡をとらなくては

～ライ観点～

あれから、俺は更にBTを一機破壊した

疲労困憊といった様子で肩で息をつくオルコットを正面に見据える

近接用の武器であるインターセプターを出してはいるものの……
扱いが下手だな

「そりそり、終わらせよう

俺は真正面からオルコットに向かって切りかかる

「くつ……まだ、まだですわ！」

BTがビームを放つ

俺はそれを最小限の動きのみでビームを避ける

軽く熱さを感じじるべりーの極々近距離

「ビームが…すり抜けた！…？」

相手からだとほとんど動いていないように見えるのだな？

オルコットが驚きと共に凍りつく

「やつやも言つたはずだ…」

「うー？」

「驚いてこる場合じゃないと」

もう既に射程圏内

これで決まりだ

「しまつ……！」

俺は両手の刀を交差させ、ブルー・ティアーズの胴体を薙ぎ払った

インターフォーマーが中ほどのところに別れ、

ガラスの破片のように散つていくシールド

絶対防御がエネルギーを消費させていく

『試合終了、勝者、皇ライ!』

決着が、着いた

ん、オルコット気絶してないか?

仕方ない背負つて行くか…

（一夏視点）

「やっぱ、凄いな～ライ兄は……」

「当然だ、ライさんが負けるはずないだろ」

「そりや そりだけどや…
でも、あんなに強いなんて知らなかつただろ篠も？」

「むつ……それはそりだが…」

よくよく考えると俺達ライ兄のHS関連の事余り知らないな…

「あ、紅月先生来られたんですか」

「ええ、試合も終わつたしね
あ、一夏くん」」苦勞様惜しかつたわね」

カレンさんが工事に来て労つてくれた

ライ兄とカレンさんだけだよ…労つてくれるの

「ところで纖斑先生、ライのHSだけど…」

「ああ、私も気になつていてな…とりあえず皇が来て『あ、帰つて
きましたよ』」

千冬姉の言葉を遮つて山田先生が指差した方には…

セシリ亞を背負つているライ兄がいた

ピキッ！

……ヤバい、この周りの温度の下がり方は……

恐る恐る十冬姉達を見てみると……

額に青筋を立ててライ兄の方を見ていた

うん……かなり恐い

「えっと……ライ兄、一体どうしたの？」

この状況で訊いた俺は凄いんじゃないかと自分で思つ

「気絶したみたいでな、とりあえず保健室に連れてこいと黙つて

「ああ、こしてもさつきからいちをジッと見てるが……どうしたんだ皆？」

『別に……』

「……や、そりか」

あの迫力は恐いの一言だろ

ライ兄も若干たじろいでるし

「じゃ、じゃあ、俺はオルコットを保健室に連れていくから

そつこいつと、ライ兄は早足で保健室に向かつて行った

（カレン視点）

代表決定戦の夜、私は千冬と一緒にある人物に電話をかけているの
だが

「はいはい、皆のアイドルのたばこ『ブチッ』」

思わず切つてしまつた

「カレン……どうした？」

「あ、ごめん

思わず切つちゃつた

再度掛け直すと

「酷いよ、こーちゃん！？」

自分から掛けてきて切るなんて！」

「「」あんね、束

余りにも非現実的な事を囁つむんだが、」切つちやつた

「謝つた後で恥ずのせびつかと思つよ、」一いつ矢やん…?」

貶すも何も貴女がアイドルなんて…………ないわね

「そんなことは置ことこて
訊きたことあるんだだけ?」

「せ、本当に酷こよーいちゃん
それで、訊きたい」といつ何?」

「今日、ワイヤレス見たんだけど……あれは何?」

「あ、うひくさんのHIS見たんだ
あれはね、うひくさんのHISが治るまでの代用機だよ~

「そんな事を訊いてるんじゃないわ~

あのHISに使つてこる技術の事をこつてるのよ~」

「あ、あれはね、束さんが開発した新しいHネルギーなんだよ~

「じゃあ、それを詳しく述べなさい。」

「それせ……こへりーーひやんでも教えられなこよ

勿論ちーちゃんこも

「せ、うのうわわわわ……

「カレン、私に替われ」

「…………はい」

私は千冬に電話を渡した

「束、私だ」

「ちーちゃん……

「一ちゃんにも言ったけどたとえちーちゃんでも三つもつはないよ」

「聞こえていたからわかっている
これ以上は訊かん」

「……だと、思つたわ

「これだけ訊いて答えないんじゃ仕方ないか……

「じゃあ、何を訊きたいのかな」

「ライさんと旅をしていたことだ」

「そうね、それは私も訊きたかったわものすいへね！」

「えつ、な、何の」とかなちーちゃん?..

「ほう……知らぬ存ぜぬを貫くか……
だがな束、正直に答えないと……」

「「」「答へなこと…?」

「斬るわ」

「弾けるわよ」

自分でも驚くくらいデスの効いた声で言ひ私と千冬

「しょ、正直に話しますー」

『じゃあ、やつをつ話して貰おつか（貰こましょうつか）ー。』

田本から遠く離れた場所で女性の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかつたとか

え～無理矢理纏めて見ました
本当に書くのは大変ですね

さて、主人公の一人称の件ですが
え～まず転生と言うことで子供の頃からやり直したと言つことは、
成長の過程で一人称も変わるので、と思った事から「俺」となり
ました。

ロスカラをやっている人、そうでない人も、ライは「僕」だらと思
うでしょうが、どうか広いお心を持つて納得していただけると幸い
です。

まだまだ、未熟な私ですがこれからもこの小説共々よろしくお願い
します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010v/>

IS 転生者は二度目の学園生活を送る

2011年9月3日02時08分発行